

異世界転移はチートと共に

式波・T・刹那

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲーム青年の「式波刹那」。

ある日ネットサイトにてよくあるオンラインゲームのキャラメイクと思えば適当にあらゆるハグキャラ、チートをぶち込んだ凶悪キャラを作っていたところへ自宅に雷が落ち、ブレーカーが落ちてしまう

家に明かりが戻った時パソコン画面のサイトには決定画面のみが映っていた。

その決定を押すと共に意識がなくなってしまう

次に目覚めた時そこは知らない街並み、世界であった…

さらに、自分の姿まで変わっていた

目の前にいた少女によりその世界の学園にて保護される事になるのだがそこには同じ境遇の人がいて…

変わった姿で、知らない世界を旅する事になる刹那はこれからどうするのか…

これは自由に生きるものの冒険録

opイメージ『RELIGHT』 edイメージ『リボリダー・アライン』

目次

キャラ作成↓異世界転移	1
異世界転移↓状況把握	6

キャラ作成↓異世界転移

1人っきりの部屋にカタカタとキーボードを打つ音が響く

「しゃー！ノーダメクリアー…ああああ疲れた…」

その部屋で1人唸っていた青年…名を「式波刹那」

学校に通うがその実、トップレベルのゲーマーである

「…あああつと、これでランクマッチは完了…後は…は…？なんだこれ」

先ほどまでプレイしていたはずのゲーム画面が切り替わり突然別の画面に変わる

「…これは…キャラメイク画面か…しかも自由入力型か…おもしろえ」

だがそこはゲーマー、ゲームだと分かると目の色を変えすぐさま作成に移った

20分後…

「あゝあゝあゝようやくできた…はは、我ながらクソチート…はは」
作成されたキャラはあらゆる面においてバグやチートと言われる能力、道具を扱うキャラである

「さてと…決定画面はつと…『プツン』はい☒」

しかし、そのタイミングでまさかのブレーカーがダウン

「まてまてー！まだ、セーブしてねえぞ！？クソた…れ？なに…」

まだ何もしてないはず、なのに自然に復帰した電気さらにパソコン画面には先程までと違い決定画面のみとなっていた

「…修正訂正は受け付けないってか…っは！おもしろえ！やってやるよー！」

勢いよくenter keyを押す

その時一瞬だけ世界が割れた

「…なんだよ…何にも起こらないじゃん…つまらね☒…の、パ、パソコン画面がこれは…？…なん…だ…」

パソコン画面に映ったのは何かの紋章…それを見た直後刹那は気を失った

……き……さい……

「うるせえなあ……誰だよ……あれ、なんで人の声が……何してたっけ……」
……お……なさ……!

「(そうだ……俺は……確かキャラ作成して……変な紋章見て……気を失ったのか……) つは……ここはどこだ!」

目が覚めた先で広がったのは見慣れた部屋ではなく見知らぬ街並みであった。

道行く人は褐色や鱗、緑色の髪や赤色などどう見ても日本で見られるような姿ではなかった

「ここは、日本じゃない……?」

「やっと起きたのね」

「っ!」

隣から聞こえた声に刹那は驚き距離をとった

「はあ、あんたね。倒れてたあんたを見ててあげた人に何にも言えないわけ?」

目の前にいたのは見たこともない服装……恐らくは制服だろう……を身にまとった女、金髪の女が立っていた

その服は白を基本色に縁を黒、上着、スカートは白黒、胸には剣と盾をあしらったエンブレムが刻まれていた

「倒れてた……?……まで、ここは……どこだ……」

「どこだって記憶でもなくしてるの? まあ良いわ……ここは……」

『大帝第1帝国都市「ロザリティア」の帝都中央学園『ラフォーリオン』よ』

「帝国都市……だと……?!?なるほどつまり……異世界か……ははおもしろえー!」

ただのゲームと思ったら知らない間に異世界転移

持ってかれたのはチート能力
さしてきて、これからどうなるのか

種族「半（サイヤ）人半龍（冥皇冰龍）」

姿 博麗霊夢 一人称『俺』性別男

備考・波紋（カーズの二百倍つまり太陽の二百倍の熱量）

使用魔法

・モナドアーツ

・DQ魔法（1から9、モンスターズ）

・帝具召喚（アカメが斬る）

↓一撃必殺『村雨』、百獣王化『ライオネル』、浪漫砲台『パンプキン』、千変万化『クローステール』、万物両断『エクスタス』、二挺大斧『ニルヴァーク』、水龍憑依『ブラックマイン』、魔神顕現『デモンズエクス』、悪鬼纏身『インクルシオ』、修羅化身『グランシャリオ』、

↓グランシャリオ、インクルシオ

↓合成悪修羅纏身『バハムート』

・能力『フレア』（メガ、ギガ、テラ）

・ネギ魔法

・召喚魔法

・ブレイカー（詠唱連結）

・精霊大魔導（オーバード、スレイヤーズ）

・アイテムボックス『オープン・クローズ』、無制限

スキル

・『スターダスト・ワールド』

↓第3部からの全てのスタンドの能力を使えるスタンド

破壊力AA

スピードAA

射程距離AA（100m）

持続性AA（10時間）

精密機動性A A

成長性E X (無限成長)

・あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力

↓致死武器、不慮の事故、B R (ブラッドレイジ)、鱗赫 (色白い1
1本)

・永劫破壊『誓約・運命の聖槍』『超越する人の理』『罪姫・正義の
柱』

・主に空を飛ぶ程度の能力

↓夢想転生、スペルカード、

モード『アツドヒート』生命維持に支障を来すレベルのダメージを

追う代わりに体内能力、程度の能力をそこあげする。さらに上の「超

デッドヒート」も存在する

・次元を司る程度の能力

↓空間操作、無創纏制(自身と他者の負の感情を全て力に変換する)

・壊毒と絶凍を扱う程度の能力

・幻想の紋章

↓物理限界を超える『血壊』、力、速さに補正『無双の太刀・黒』

リミッター解除時のみ使用可能

・あらゆるものを再生する能力

・瞬間移動する程度の能力

・何度でも蘇る程度の能力

・世界を操作できる程度の能力

・速さを操作できる程度の能力

・戦闘力を操作する程度の能力 (サイヤ人)

・災害を起こす程度の能力

・想像したものを創造する程度の能力

↓携帯獣の力を扱う程度の能力

・反転する程度の能力

・電気を操る程度の能力

・星を破壊する程度の能力

・運命を断ち切る程度の能力

所有神器

- ・赤龍帝の籠手↓赤龍帝の羽衣↓真紅の龍帝刀
- ・白龍皇の光翼↓白龍皇の双刀↓純白の龍皇衣
- ・魔獣創造↓新世界の創造主

宝具

- ・『約束された殲滅の邪鎌』エクスカリバーモルガン 対城
- ・『炎輪憤怒す波紋砲』フレイルムキラオーバードライヴ 対城
- ・『消滅術式・星落園極致』スタード 対界
- ・『虚偽・螺旋剣F』カラドボルグフアイナル 対軍
- ・『星崩・次元の裂け目』ほしくず・デイメンシヨンロスト 対界
- ・『真王の財宝』ネオゲート・オブ・パレロン

装備

・鎌、牙狼、魔剣、人形（朱婉、蒼魄、黄業、緑禪、白羅、極鰲、光
魔、忌影、血鬼、神忌、皇禍、終墮天、死神の十三体）、二丁銃（ブルー
ローズ、ジャツカル）

異世界転移↓状況把握

前回までのあらすじ

ゲーム青年の『式波刹那』

オンライン型のゲームと思い作成したキャラの姿になって異世界

へ

そこで出会ったのは金髪の女だった

「で？あなたは何者？どこから来たの？その服は？」

「待て待て待て！質問は一つずつだろうが…はあ、名前だが人の名前を聞く前に自分の名前を言えよ」

「…質問したのは私なのだけど…私の名前はアリス、『アリス・マーガトロイド』よ」

「マーガトロイドさんね…俺は刹那だ…よろしく」

「刹那ね…よろしく」

お互いが握手を交わしたところで刹那は周りを見渡した

一見すると西洋風の建物が並ぶが所々に見たことのないまたは現代ではありえない店が並んでいた

「(なんだよポジションってあれか回復とかのか…それに武具屋って剣とか盾かよ一昔前か…)で、次の質問は？」

「どこから来たの？突然現れたように見えたけど？」

「ああ…転移直後を見たのか…そうだな別世界…とか言ったら信じるか？」

おそろくふざけてるか頭のおかしい奴と思われるだろうと考えていた刹那

「信じるわよ？あなたみたいなのはよくいるから」

「…は？」

よくいる？転移者が？まさか…

「よくいるのか？そいつらは何処に？」

「基本的には各都市の学園にて保護されているわ」

「基本的には…ね。つまりその枠にはまらない奴らもいると…」

「ええ、保護を嫌った人たちはギルドに所属しているわ」

「ギルド…ねえ…なんだこの世界には魔物でもいるのか？」

「ってそんなありきたりな展開があつてたまるかつての」

「…いるわよ…この世界には魔王と呼ばれる者とその国が」

「ありきたりか！…すまん…不謹慎だったな」

「気にしないわ。貴方のような反応は見て来たわ」

「そうか…で、現状俺はどの扱いだ？この都市の学園とやりに保護か？」

「…そうな…貴方、転入してみる気は無い？」

「…はい？お前にそんなこと出来んのかよ」

「いえ、その選択権が貴方にはあるってことよ」

「(つまりここで保護か生徒か選べと…しかし、この場合保護という言葉は隔離と同義語だな…なら。)生徒だな…なつてやるよ。」

「わかったわ、なら今すぐ学園に向かいますよう。丁度いいわ」

「丁度いい？何がだ？」

「いま丁度進級トーナメント戦中なのそこで貴方を私のパートナーとして登録するわ、そのトーナメントで優勝できれば願いを一つ叶えてもらえるわ」

「つまりそこでお前と勝ち上がり学園に入れ…とそして、お前は進級トーナメントで好成績を収められると…」

「そうよ…この話のる？」

普通ならこんな話になるものは少なく疑い、信じなく話を断るだろう…しかしこの男は違う

何よりも面白いことを願い、楽しみ生きる

その男かこんな博打にならないか？否だのるに決まっている

「良いぜ、乗ってやる。」

「なら、このカードを持って、パートナーとして登録するわ…あ

と、そこには貴方の力が現れるはずよ」

「ステータスプレート代わりか…生徒手帳つてか？…お、来たな…へえ？…（まんま作ったキャラのままか）マーガトロイド…勝つぞ」

「ええ、勝ちましょう」

「ただし、足手まといなら置いてくからな」

「貴方の方こそ一回戦敗退とかやめてよね？」

この出会いは必然か偶然か

刹那の異世界生活をかけた戦いが始まろうとしていた